

若手研究者のための研究キャリア発見マガジン

2025. 春号  
vol.68  
[インキュビー]

incu・be



特集

「いいね!」で終わらない  
熱い連携研究の  
はじめ方

## 特集 「いいね!」で終わらない 熱い連携研究のはじめ方

- 04 剥き出しの好奇心をぶつけ合う交流で、お互いの「本気」が見える  
(伴 和幸 さん 豊橋総合動植物公園 動物研究員)
- 06 「一番遠い」と思った相手との間に、実は隠れた接点がある  
(中畑 敏哉 さん 崇城大学大学院 工学研究科 博士後期課程1年 / 株式会社P&A 代表取締役社長)
- 08 分野ではなく情熱を共にした異分野が自身の領域を広げる  
(森 耕太郎 さん 弓削商船高等専門学校 電子機械工学科 助教)

### Blast off! 世界を変える私の活動

- 11 「自由研究の自由研究」から創りたい未来  
(矢吹 凌一 さん 東京大学大学院 薬学系研究科 薬科学専攻 博士課程3年)

### あの町の研究者を訪ねて

- 12 異分野との「未来」の議論が、医療現場に寄り添う研究に繋がった  
(稲富 惇一 さん 高知健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション科所属)

### Germination Reactor 私がベンチャーを作った理由 -

- 14 思いを伝えた同級生に背中を押してもらった  
(町田 紘太 さん fabula株式会社 代表取締役CEO)

### 伝える、学ぶ、そして育む。それが研究コーチ

- 16 研究の醍醐味を伝える、未来の大学教員を目指して  
(馬場 愛里 さん 滋賀県立大学大学院 環境科学研究科 修士1年)

### 探しにいかう 自分の場所

- 18 研究と実務の両輪を回せるプレーヤーを目指して  
(岩本 慧悟 さん 株式会社ZENKIGEN ZENKIGEN Lab 研究員 / 東洋大学大学院 博士後期課程)
- 20 命を救いたい! 本気の行動が出会いを導き、想いの実現へ  
(浅川 拓克 さん 八戸工業大学 工学部 准教授)
- 22 北極から始まった、生態学研究者という生き方  
(吉竹 晋平 さん 早稲田大学 教育・総合科学学術院 准教授)

### お知らせ

- 24 私らしく、研究者として生きる道へ「アド・ベンチャーフォーラム」
- 26 研究キャリアの相談所
- 27 『incu・be』を作っているのはどんな人?
- 28 リバネス採用ページ

特集

# 「いいね!」で終わらない 熱い連携研究の はじめ方

学会はいろいろな研究者と連携するチャンス。でも、発表や意見交換・アドバイスで終わりがち・・・と悩んでいる研究者へ。

今回は、超異分野学会<sup>(※)</sup>の参加者で、初対面・異分野にもかかわらず仲間を見つけ、新しい研究プロジェクトを始めた研究者の事例から、「いいね!」だけで終わらない、連携研究のはじめ方を考える。

学会当日、どのような出会いから火種が生まれ、その後も活動を続けることができたのか。そして、その経験を通じて研究者自身にどのような変化があったのだろうか。

(※) リバネスが主催する超異分野学会 (<https://hic.lne.st/>)



# 剥き出しの好奇心をぶつけ合う 交流で、お互いの「本気」が見える

## 伴 和幸 さん

豊橋総合動植物公園  
動物研究員

豊橋総合動植物公園で研究員として働く伴和幸さんは、動物の飼育だけでなく、研究活動を積極的に行っている。動物園の可能性を広げたいと語り、新しい活動を行う伴さんは、ミミズの研究者の遠藤颯さんとの出会い、思いも寄らなかったプロジェクトを始めることになる。



### 異分野と繋がり動物園の可能性を広げたい

元々は魚が好きで修士課程まで進んだ伴さんは水族館でイルカなどの海棲哺乳類の飼育を担当していた。研究にのめり込むようになったのは、ホッキョクグマを担当したことがきっかけだ。「これまでに飼育してきた動物と違ってクマの生態を学ぶ必要があったのですが、それがとても楽しかった」と当時のことを話す。その一環でホッキョクグマでは健康管理のための採血が難しく、世界的にも実施例が少ないことを知った。そこで伴さんは、水族館のショーを通して身につけた動物のトレーニングスキルを使って採血を成功させた。未知のテーマでも好奇心を持って学ぶことで、世界初の研究ができる可能性を実感した瞬間だった。

その後、この採血の手技を応用できればより多くの動物の健康管理に役立てられると考えた伴さんは、動物園でトラやライオンの採血を成功させ

ている。他にも、より野生に近い状態での飼育をするために、園内の動物たちにシカなどの獣肉を与える活動にも注力している。「本来廃棄されてしまう獣肉を使うことで、飼育環境を改善できます。動物園には飼育以外に教育や研究を担う役割もあるのです」と語る伴さんからは、動物園という場所にまだまだ可能性があることを伝えたいという情熱が伺える。実際、豊橋総合動植物公園で伴さんは来園者への教育活動も積極的に行っている。動物園のもつ可能性を、さらに異分野との繋がりでも広げていきたいと考え、超異分野学会に参加した。

### 面白そう・本気でやれそうと感じた時間

超異分野学会に参加した伴さんは、ミミズの系統分類に関する研究に取り組む遠藤さんに出会う。初めは、軽い興味で話しかけたが、遠藤さんの熱心な説明を聞いて、今まで詳しく知らなかったミミズの生態に関心を持ったという。そし



▲遠藤さん（人物中央）と株式会社みみずやの滝澤宏樹さん（人物右）とコンポストを設置する伴さん（人物左）（左）。園内で廃棄される野菜（右上）。コンポスト内のミミズ（右下）。

て、動物園で課題となっていた、タンパク源として与える高単価な虫の代替や、調理の際に出る野菜残渣の処理を同時に行えると考えた。その場で連携可能性がないかを議論したが、遠藤さんから積極的な意見が出て、数時間の間にプロジェクトの素案が出来上がった。そして、動物園でミミズを育て、飼育動物に与えるプロジェクト「MIMIZOO」が生まれたのだ。ミミズの生態や飼育の難しさを知る遠藤さんと連携するからこそできる取り組みだが、決め手になったのは研究に対する情熱だという。普段は多くの業務がある中で、時間を割いて共同研究を進める場合には相手のやる気も必要となる。「ポスター会場での短い時間で計画を詰めつつ、相手の本気度を知ることができた」と大会当日を振り返った。

## ワクワクがあれば、忙しい中でもコトが進む

大会終了後、二人はすぐに動きだした。オンラインで議論しながら動物園内で研究を行うために

必要な申請を進め、大会の2ヶ月後にはミミズ飼育用のコンポストを園内に設置した。このスピード感からも両者の熱量の高さが伺える。今では、遠藤さんのミミズの調査に伴さんが同行することもある。「調査に行った時の遠藤さんの顔が輝いていて、だからこそ協力したくなる」と語る伴さんからは、遠藤さんとの出会いで自身の中に新しい情熱が芽生えている様子が伺える。彼と共に活動することが、日々忙しい中でもMIMIZOOを進める力になるのだろう。

今後は育成したミミズの給餌や動物園での展示に向けて、衛生上の課題の解決や、そもそも園内の動物がミミズを好んで食べるのかといった検証を行っていく予定だ。動物たちの生態や特徴をより深く知りたいという強い好奇心を原動力に、二人で課題を乗り越えて活動していくに違いない。

（文・八木 佐一郎）

### 伴 和幸（ばん かずゆき）プロフィール

大学時代は海洋学部所属し、深海魚の研究を行う。その後、水族館や動物園で働く中で、研究員を募集していた豊橋総合動植物公園を知り、入園する。現在では、研究や教育活動にも取り組みながら、飼育以外の動物園の機能を社会に広めるための活動を行う。屠体給餌などを通して、野生に近い状態で動物を飼育し、QOLを高めることや環境教育に役立てることを目指すWild me&et Zooの理事も務める。

# 「一番遠い」と思った相手との間に、 実は隠れた接点がある

## 中畑 敏哉 さん

崇城大学大学院 工学研究科 博士後期課程1年  
株式会社P&A 代表取締役社長

微細藻類に関する研究成果をもとに株式会社P&Aを立ち上げた崇城大学の中畑敏哉さん。超異分野学会から帰ろうとしていた先で出会った山形大学の戸森央貴助教とは、連携のイメージが全くわかなかった。しかし、中畑さんの自己紹介を聞いて戸森さんが提案したアイデアを「まず試してみよう」という姿勢で臨み、今回の連携はスタートした。



## 人工筋肉と藻場再生が繋がった驚き

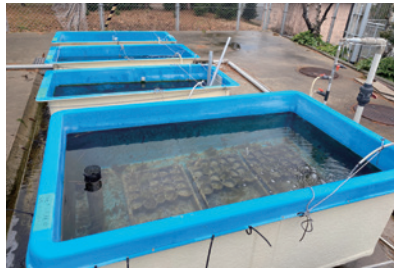
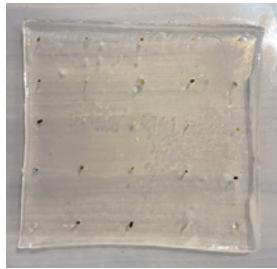
「実はもう帰ろうとしていた時に、リバネスの方から誘われて議論に参加しました。初めに自己紹介として戸森先生の研究内容を聞いた時には、正直連携には一番遠い研究だと思っていたんです」と中畑さん。戸森さんの専門はロボット用の人工筋肉の開発だ。しかし、戸森さんの方から、中畑さんが自己紹介で話した藻場再生への活性化剤の活用に自分が人工筋肉の材料として開発したゲルが使えるのではないか、というアイデアをもらい、その時初めて連携ができる可能性に気がついた。

中畑さんが開発する微細藻類活性化剤「Algae Power」は、適度なストレスを与えて微細藻類を活性化させることで、細胞の増殖を促進させる。これまでの崇城大学での研究から、光合成細菌は微細藻類だけでなく植物の生育にも効果があることが確認されており、農業だけでなく、近年課題となっているアマモなどの藻場再生にも応用が期

待されている。中畑さん自身も以前から藻場再生の応用に関心を持っていたものの、現在の活性化剤は液体であるため、海中ではすぐに拡散してしまい、そのままでは活用が難しく手をつけられていなかったのだ。戸森さんの開発したゲルにアマモ用の活性化剤を保持させて苗床にすることで、海中に簡単に設置でき、アマモへ効率的に活性化剤を届けられることが期待できる。

## 間髪入れず、メールでやり取りを開始

超異分野学会で出会った直後からメールでのやり取りを始め、外部予算を獲得しながら実証実験を行っている中畑さんだが、「お互いに、活性化剤とゲルという、すぐに実験に使えるものがあっても、共同研究をすぐに始められた要因かもしれません」と中畑さん。指導教員が過去に参加したアマモサミットで繋がっていた、アマモ場の水質調査、再生を専門とする福井県立大学の緒方太陽さんをアマモ栽培の実証実験担当として仲間に入れ、3者での共同研究がスタートした。現在



◀戸森さんのゲルに活性化剤を含有させたゲル苗床(左)と、福井県立大学内で実験中の水槽の様子(右)

は、活性化剤を保持したゲルの効果の実証実験を、福井県立大学内の大型水槽や小浜湾沖、崇城大学内の水槽で行っている。

### 他者と協働し研究成果を発信する研究者へ

中畑さんは、社会課題の解決には異分野との連携が必要だと以前から考えていたという。藻類の培養にはバイオの知識だけでなく、光源など異分野の技術も必要だ。さらに、現場で活性化剤を利用する人たちもまた、農家や漁業者など異分野の専門家だからだ。とはいえ、異分野の研究者との共同研究は初めてだという中畑さん。その中で新しい発見もあったようだ。「僕は応用が中心ということもあり、アイデアがあったら『まず試してみよう』という考え方なんです。一方で戸森先生は基礎研究をされていて、1つ1つ理論を積み上げて提案をしてくださいます」。例えばゲルに利用する純水を水道水に変えて実験できないか、製品化を見越した実験を提案する中畑さんには、ゲルの機能が低下しないかの検証を提案してくれるという戸森さん。社会実装に向けて、考えをすり合わせて開発を進める予定だ。

「基礎と応用どちらも重要で、自分は応用研究でもっと世の中に研究成果を発信していきたいタイプなんです。ベンチャーとしてアカデミアと連

携して開発した製品を世に送り出していくことで、研究者の技術を社会に発信していく役割を担いたいと考えています」と中畑さん。博士号取得後は、P&Aを代表として成長させながら、アカデミアにもポストを持って研究を進め、研究成果を社会に出していきたいと考えている。藻場再生については、現在現場ではアマモの種子不足も課題だ。この課題解決に向けて、種子の選別の効率化のためにAI分野などとも連携をして事業を広げていく考えだ。これから異なる分野、立場と連携して研究開発を進め、新たな社会課題の解決方法を生み出していくことだろう。(文・戸上 純)

中畑 敏哉 (なかはた としや) プロフィール  
崇城大学応用生命科学科に入学後、崇城大学起業部に所属し様々なビジネスプランを立ち上げを経験し、2022年に株式会社P&Aを設立。現在は崇城大学大学院工学研究科博士後期課程に在籍し、微細藻類に及ぼす光合成細菌エキスの効果の研究を行いながら、株式会社P&Aの代表取締役社長を務めている。

特集 「いいね!」で終わらない熱い連携研究のはじめ方

# 分野ではなく情熱を共にした 異分野が自身の領域を広げる

森 耕太郎 さん

弓削商船高等専門学校  
電子機械工学科 助教

愛媛県の弓削島にある弓削商船高等専門学校(弓削商船高専)で、離島工学という考え方で研究を行う森耕太郎さん。超異分野学会2024大阪・関西大会では、企業、ベンチャーとの混成チームを形成して、フィリピンの水教育プラットフォームの構築という新規プロジェクトを立ち上げた。初対面のメンバーとの連携アイデアを生み出すに至った背景には、森さんの研究スタイルも深く関わっている。



## 島の課題を島にあるもので解決する

研究のヒントは、日常の何気ない会話にある。「町をぶらぶらしていると、魚が減ったとか、イノシシが増えて困っているとか、町の人々の様々な声が聞こえてきます」と語るのは、弓削商船高専の森さん。元々、エネルギー分野の専門を持ち、バイオ燃料の研究を行っていた森さんは、2017年に弓削商船高専へ助教として赴任したことをきっかけに、離島工学という、離島に存在する課題の本質を捉え、技術を組み合わせることで解決方法を考える分野の教育にも携わるようになった。弓削商船高専が掲げる離島工学は、「離島の抱える課題を地域コミュニティと連携し工学的視点から解決すること」と定義される\*。

町歩きの中で、森さんが着目する課題の一つが、放置竹林問題だ。学生達と共に、伐採した竹を原料にした竹炭を製作すると、その吸着作用を活かして、海洋ゴミのマイクロプラスチックの回

収ができないかを試みた。実験の過程で竹炭に海洋微生物が付着することを発見し、竹炭を使った人工魚礁を開発した。現在は水中ドローンを使った観察にも取り組む。「人の困りごとを工学的な視点から解決できれば、専門に拘る必要はありません」と森さんは語る。

## 「水と教育」への情熱で繋がったチーム

超異分野学会ではロケットストーブを活用した被災地向けの可搬式温水・蒸気供給システムを開発するという、離島工学に基づく学生主導の研究を発表した。長年このテーマに携わっていた弓削商船高専の伊藤武志教授とポスター発表をしていると、自社のフィルターを組み合わせられないかと声をかけてくれたのが、安積濾紙株式会社の白石松太郎さんと森和成さんだった。さらに、水域の自然環境を水槽などを用いて陸地に再現する環境移送ベンチャーである株式会社イノカの竹内四季さんがここに加わり、参加者同士で新たに研究

\*工学教育 (J of JSEE) , 67-4 (2019)





▲超異分野学会2024大阪・関西大会での議論の様子

プロジェクトの創出を目指すプログラム「知識製造イグニッション」での「フィリピンにつながる超異分野な研究テーマ」に関する議論が始まった。

「私たちのチームは、皆さんが水と教育に関して強い思いがあったので方向性はすぐに決定しました。しかし、フィリピンのことは全く知らないため、とにかく課題を知ろうと考えました」。森さんらは、フィリピン出身のリバネスメンバーを囲んで現地での困りごとをヒアリングしたところ、河川や湖沼、海域の水質汚濁は深刻であり、その要因の一つに学校での水教育が行き届いていないことが考えられた。そこで、フィリピンの教育現場に届ける教材プログラムを開発して、水環境保全の意識を向上させる教育プラットフォームを構築するというテーマでエントリーをしたところ、森さんらのチームが見事に超異分野賞を獲得した。

## 「行動」を続け、生まれた火を絶やさない

今まで関わりのなかった分野や業種の方々と、

いわば部活仲間のような関係性で共に取り組むアイデアを出し合うことで、知識製造「イグニッション（点火・着火）」で生み出した火。この火をいかに燃やし続けられるかが、森さんの挑戦だ。学会以降、チームで複数回のオンラインミーティングを行い、出会いから3ヶ月後の2024年11月には、なんとメンバーでフィリピンに渡り、現地に一次情報を得に行った。フィリピンで開催された超異分野学会への参加を渡航の起点として、現地の研究者や教育関係者と直接対話することを実現させたのだ。「超異分野学会での受賞は、単なる励みではなく、新たな使命の始まりでもあります。これから研究資金の獲得にも力を入れ、自身の研究活動をさらに高いステージへと進化させていきます」と語る森さん。今後は現地の水の課題についての理解をさらに深め、実際に学校での出前授業を実施したいと考えている。弓削島から生まれた離島工学は、今や日本と同じ島国であるフィリピンに拡がっていこうとしている。場所は異なれど、大切なことは、現地の人の声を聞き、その課題を理解すること。森さんの町歩きは、島を渡り、国境を越えて、いずれ世界の地域課題の解決につながる第一歩になるはずだ。

(文・井上 剛史)

森 耕太郎 (もり こうたろう) プロフィール  
滋賀県立大学大学院工学研究科先端工学専攻博士課程修了。バイオ燃料に関する研究を行う。事業会社勤務を経て、2017年4月より現職。弓削商船高専では、離島工学に基づく教育及び研究活動に従事する。島の課題を島の資源を活用して解決するという方針でテーマを立ち上げ、学生と共に研究に取り組む。

# 誰かの情熱と重なる火種をみつけ、 その場で一歩目を決めて息を吹き込む

三人とも、分野も背景も異なり、一見すると共にプロジェクトに取り組むなど想定できなかったが連携の火種を見出した。

事後で話す日程を決め、相手の仕事場に行く、ひとまず実験してみる、海外の現場を見に行く、という小さな行動を積み重ねて、情熱の炎を大きくしていった。

議論で終わらずに、その場ですぐ次にやることを決める。それが生まれた火種を絶やさない唯一の方法なのだ。

学会では、研究内容だけでなく、背景にある自分の興味の源泉も思い切って開示してみよう。分野は遠そうでも「面白そうですね」と話しかけてみよう。そして「いいね!」と思えるアイデアが生まれたら「最初に何からやろうか」「いつ次に話そうか」とその場で切り込んでみよう。

そして、自分だけではたどり着けなかった新たな領域を切り拓いていこう。





世界を変える。それは大それた事かもしれませんが、それでも小さな一歩を踏み出すところから、それは始まります。本コーナーでは『リバネス奨学金』を活用して、世界を変える活動を開始した若手研究者の声を紹介します。

## 「自由研究の自由研究」から

## 創りたい未来

東京大学大学院 薬学系研究科 薬科学専攻 博士課程3年  
矢吹 凌一 さん



「自由研究の自由研究をしています」——この一風変わった自己紹介を始めたきっかけは、リバネス奨学金の活動でした。

中高で化学部に所属し、文化祭の実験ショーにおいて小中学生や保護者の方々に科学の話がなかなか伝わらなかった経験から、科学コミュニケーションに興味を持ちました。大学院での6年間の基礎研究（細胞生物学）と並行して、小中学生向けの自由研究支援のYouTubeやワークショップに取り組んでいました。この活動でリバネス奨学金に申請して採択され、第一期（2023年）のゼミに参加しました。そこで出会ったゼミ生とともにワークショップを新たに実施し、その一環で自由研究の展覧会（中学生時に自分も出展していたもの）へと足を運ぶことになりました。

展覧会でいろいろな自由研究に触れ、研究に対する純粋な思いや探求心が応援されることに貢献したいと考えました。自由研究は全国的に行われていると思うので、その応援が研究成果の創出につながるという仮説を立てています。「自由研究の自由研究」というフレーズには、あらゆる自由な研究を支えることで、自由研究のワクワク感が広まり、ひいては大学院生や大人の研究者が取り組んでいる研究も応援される社会を創りたいという思いを込めています。

ただ、大学院最終学年の2024年度は、上記

の活動をセーブし、細胞生物学の研究だけに集中してきました。昨年度までは、なかなか結果が得られずに苦しかったのですが、今年度は、これまでの地道な条件検討が奏功して成果を出すことができました。博士業績発表会において、他の先生から重要な研究だと評価され、自分の自信につながっています。

4月からは就職し、あらゆる研究者の探求心を最大化するサポーターとして働きます。研究で培ったものを最大限に活かし、「自由研究の自由研究」で目指す未来を創っていきたいと思います。



▲仲間と取り組んだYouTubeチャンネル『みんなの自由研Q』のサムネイル

自分のホームページにおいて、より詳細に思いを述べています。「“自由研究の自由研究”」で検索するか、QRコードからお読みください。何かあればお気軽にご連絡ください。



# あの町の研究者を訪ねて

このコーナーでは、ユニークな活動を続けている研究者を訪ねて日本各地を巡ります。もしかしたらあなたのいる場所のすぐ近くでも、研究の旅路に行く素敵な誰かに出会えるかもしれません。

## 異分野との「未来」の議論が、 医療現場に寄り添う研究に繋がった

高知健康科学大学  
健康科学部 リハビリテーション科所属

稲富 惇一 さん

高知健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション科所属。作業療法士を目指す大学生の教育に携わっている。研究は主に子どもを対象としており、これまでに四国作業療法学会優秀賞、博士課程修了時に学生優秀賞を受賞。また、生命の基金助成を3度獲得した。2026年には、歴代最年少で四国作業療法学会の学会長を務める予定である。昨年の超異分野学会をきっかけに企業との連携が実現し、現在も共同プロジェクトを進行中。趣味は焚火と、子どもと一緒にポケモンカードで遊ぶこと。



普段は患者さんの日常生活を支援するリハビリを行う作業療法士として働いています。いつでも誰に対しても高いリハビリテーション効果を発揮できるように、確かなデータと知識・知見に基づいたアプローチを実現したいと考え、31歳のときに博士課程へ進学しました。大学院で取り組んだのは、「子ども達の運動能力の向上・改善を図るために嗅覚刺激を効果的に用いる」ための方法論の確立。海外の知見を参考に、日本での応用を検討しました。博士号を取得し、研究者として立ちがでる嬉しさはありましたが、さらに研究を発展させ、他業種と連携するにはどうすれば良いか悩んでいました。

そんなとき小学校の同級生から「超異分野学会2024 大阪・関西大会」のお誘いがありました。自分の知識を異分野の業界に役立てること、異分

野の知識から新たな研究のきっかけを掴み、研究者として視野を広げることを期待して参加しました。非常に刺激的だったのは、年齢や分野の垣根を超えて同じ志を持って課題解決を目指す仲間と出会えたことです。発表テーマに対して、皆が「一緒にこんなことができたなら面白いね」「何かできるかもしれない」と真剣に研究に向き合い、議論をしてくれました。現在、ここで出会った全く業界の違う方と共同研究にまで発展しています。これからも作業療法士、研究者として、患者さんに寄り添える研究を進めていきたいと思っています。

(文・正田 亜海)

## 超異分野学会に 研究仲間を探しに来ませんか？

超異分野学会は、研究者、大企業、町工場、ベンチャーなど、多様な参加者が議論を通じ互いの知識や技術を融合させる場です。ポスター発表・ブース展示・セッション等が企画されています。これまでになく研究テーマの創出、課題解決のアプローチを建設的に議論し、垣根を超えて共に最先端の研究開発を仕掛け続けます。またこの場では、新しい研究仲間との出会いが待っています。その仲間と共にあなたの研究をさらに加速させ、新たな知識を生み出しませんか？

### 大阪大会でポスター演題&超異分野スプラッシュ\* 演題募集中!

[対象分野] あらゆる研究

[参加対象者] 中学・高校生、アカデミア、ベンチャー、大企業、町工場、自治体 etc…

[参加費] アカデミアの研究者・学生は無料



#### \* 超異分野スプラッシュとは

「(水などが) 跳ねる・飛び散る、ザブンと落ちる」の意味にちなんで超異分野スプラッシュ。90秒ずつのピッチで、自分のやりたいこと、参加者に求めていることをぶつける場です。次々と登場する研究者の知識と熱を浴びながら、熱を持った研究者の発見、新たなアイデアの発想、ポスター発表での深い議論への発展を狙いとしています。

#### これからの開催予定

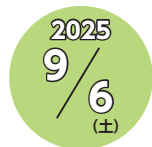


#### 超異分野学会 東京大会 2025

[日時] 2025年3月7日(金)～3月8日(土)

[場所] ベルサール新宿グランド コンファレンスセンター  
(東京都新宿区西新宿8丁目17-1 住友不動産新宿グランドタワー 5F)

[聴講者募集中] [https://lne.st/2024/11/01/hic2025tokyo\\_audience/](https://lne.st/2024/11/01/hic2025tokyo_audience/)



#### 超異分野学会 大阪大会 2025

[日時] 2025年9月6日(土) 09:30～18:30

[場所] グランキューブ大阪 (大阪府立国際会議場)  
(大阪府大阪市北区中之島5丁目3-51)

[演題登録締切] 2025年5月31日(土)

エントリーについて、詳しくは [こちらから](https://hic.lne.st/schedule/osaka2025/)  
<https://hic.lne.st/schedule/osaka2025/>



# 思いを伝えた同級生に背中を押してもらった

町田 紘太 さん

fabula株式会社 代表取締役 CEO

「ゴミから感動をつくる」をビジョンに掲げ、食品廃棄物から新素材を作り出すfabula株式会社を創業した町田さん。同級生から背中を押されて会社を設立したという。設立までの経緯を伺った。

## 身近な課題が全ての原点

町田さんはオランダの小学校に通い、当時の家は海拔マイナス2メートルの場所にあった。地球温暖化による海面上昇を授業で学び、いずれ家も沈むかもしれないと身近な課題だったという。大学生では元国連職員から指導を受け、ニューヨークにある国連も見学し、ますます環境問題の解決に関心を強めた。3年次までは文科一類だったが、理系の頭の使い方ができなくなると思い「理転」している。環境負荷の高いコンクリートの代替材を開発する研究室を選び、町田さんは規格外野菜や食品加工時の端材など食品廃棄物を乾燥させた粉末を熱圧縮して成形する、という新素材の研究に取り組んだ。白菜を用いるとコンクリートの4倍の曲げ強度を持つ。

## 同級生と起業し、楽しさを追求へ

研究が進むにつれて、開発した素材で製品を作りたいと思うようになった。研究しながら製品を直接届けるには、卒業後の進路としてアカデミアも大手企業も選択肢にならず、起業も考えていると周りに話していた。そのうちに、小学校の同級生2人から、起業するなら一緒にやろうと声をかけられた。言い出したのは町田さんだったが、思



いに共感してくれた2人からむしろ後押しされるように起業の道に進んだという。こうして3人で2021年に会社を設立するに至った。

ラテン語で“物語”を意味する社名の通り、ゴミにストーリー、デザインや機能性を付加し、純粋に良いと思ってもらえる製品作りを目指している。リサイクルではなくリクリエイトという言葉を使うのはこだわりだ。茶室の建材や、月で使える建材の開発など活動の幅を広げ、2025年の大阪・関西万博でも建材を披露する。

試行錯誤の日々だが、設立から3年経ち「とても楽しい」と笑顔で話す。ベンチャーでは小学生から大企業まで、アカデミアから農家まで幅広い年齢や属性の人と関われ、やりたいことをどんどん試せる楽しさがあるという。楽しさと社会課題解決を追求するその笑顔の奥には熱い眼差しがみえて取れる。

(文・塩川 雅貴)

1992年生まれ。東京大学工学部卒。東京大学生産技術研究所 酒井(雄)研究室にて、「100%食品廃棄物から作る新素材(特許技術)」を開発。2021年10月、小学校からの幼馴染3人でfabula(ファープラ)株式会社を設立。廃棄されたゴミにストーリーを見つけ出し、感動をつくることを目指す。

## 概要

- 社会実装したい研究シーズはあるが、起業のことはよくわからない…
- 経営や起業に興味はあるが、勝負できる技術がない…
- 自分の力を試し、社会に貢献する仕事がしたい…
- 仲間をどう集めたらいいか、ベンチャーやお金周りに詳しい人が周りにいない…

本プログラムは、研究者や若手アントレプレナーが集まり、お互いの強みを組み合わせて、経営に必要なマインド醸成・チーム形成・事業計画策定・会社設立の支援まで一気通貫で行い、社会課題を解決するビジネス創出を目指します。

現在参加が決まっている研究者のシーズ・関心領域（一部抜粋）

レジリエンス/ダイバーシティ/ケアテック/医療/ものづくり/エコテック/食糧生産/地域活性化/エネルギー

## 先輩起業家の声



**坪井 俊輔** さん  
サグリ株式会社  
代表取締役 CEO

熱意を持った若い世代と大学の技術を持つ先生方が結集し、新たな挑戦が始まることを心から応援しています。革新的なアイデアと情熱が、人類と地球への貢献を実現していくことを期待しています！

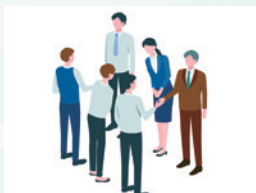


**宇井 吉美** さん  
株式会社 aba  
代表取締役 CEO

自分が人生を賭けて手がけた研究開発を社会実装したいと思ったら、いの一番にリバネスさんの門を叩こう。人、金、情報、設備、ノウハウ。何よりも諦めない情熱を灯してくれる。

## プログラムの流れ

出会い (1回) 2025年3月



研究者・若手人材が一同に会し、本プログラムの主旨を理解するとともに、互いの強みや思いを共有します。

相互理解 (6回)  
2025年5月～7月



マッチングで出会ったメンバーと事業化に向けた具体的な議論を通じて相互理解を深め、チームビルディングをします。

事業計画の立案 (3回)  
2025年8月～10月



チーム形成ができれば、各チームで資金調達を目指した事業・資金調達計画を作成します。

DEMO DAY  
2025年11月



実際の資金調達を模したプレゼンテーションを行い、互いの本気度を確認します。

本格チーム化・会社設立へ

## 次の一步

プログラムWebサイトはこちら→



学生・若手人材のエントリーはこちら→



# 伝える、学ぶ、そして育む。それが研究コーチ

若手研究者が中高生の研究に伴走して指導する研究コーチ。単なる教育活動以上に、自分に返ってくる気づきや発見があるはずです。このコーナーでは、研究コーチの経験を通じて成長する若手研究者の姿を取り上げます。

## 研究の醍醐味を伝える、 未来の大学教員を目指して

滋賀県立大学大学院 環境科学研究科 修士1年  
馬場 愛里 さん

滋賀県立大学大学院環境科学研究科にて、果樹栽培で廃棄される剪定枝のヤギ用飼料としての活用可能性を探っている。中学生時代に読んだ農業高校を題材にした漫画をきっかけに同大学農学部へ入学。動物への関心から家畜を扱う現在の研究室へ。将来は大学教員として、研究と教育の両面で活躍することを目指している。



畜産分野への興味を胸に滋賀県立大学に進学し、現在の指導教員との出会いを経て研究の世界に足を踏み入れた馬場さん。当初は大学院進学を考えていなかったが、研究室での日々を通じて研究の魅力に取り付かれていった。「仮説を立てて進める検証はうまくいかないことが多いけど、本当に楽しくて」と、研究にのめり込むと同時に、自らが感じている研究の魅力を次世代に伝えたいと考えるようになった。また、指導教員が興味の赴くままに研究を進める姿にも憧れ、その結果、大学教員という夢が芽生えた。

そんな彼女に指導教員が紹介したのが、滋賀県内の中高生の研究活動を支援する「滋賀ジュニアリサーチグラント」だ。馬場さんはこの研究コーチにすぐに登録した。2024年7月から約半年間、中高生の研究に対してメールやオンライン面談でアドバイスを行った。サポートした研究チームは、最初の実験で思うような結果が得られず、大きく落ち込んでしまったという。「研究では失敗の方が多く、大切なのはそこから何を成果として

学び取れるかだ、と一生懸命伝えました」と馬場さんは振り返った。生徒らと次の一步を粘り強く一緒に考えた結果、生徒たちは自主的に失敗の原因を調べ始め、新たな仮説を導き出していった。それは教科書には載っていない、生徒たちならではの柔軟な発想で、馬場さん自身が新鮮な驚きを覚えたという。「大学教員にとって、学生と研究するとはこういうことなのかもしれない」と、大学教員を目指す馬場さんにとって中学生の研究支援は単なる教育活動以上の意味があった。

今後は、自身の研究として人と家畜のどちらのストレスも軽減された飼育環境の実現という新たなテーマを考えている馬場さん。「才能の有無に関係なく、諦めずに取り組める研究者を育てたい」。中高生との対話を通じてその思いはより確かなものになった。今回サポートした中学生が学生となり、大学教員となった彼女とともに研究する日が来るかもしれない。そんな未来を夢見ながら、馬場さんは今日もヤギの世話に勤しむ。

(文・仲栄真 礁)

**研究コーチは随時募集中！登録はこちら！**

(リバネスIDのログインが必要です)





# 探しに行こう 自分の場所

目標を見つけ、実力を養い、  
理想の場所にたどり着くために  
どんな道を進むべきだろうか。

どんな研究者になりたいのか、  
活躍するには何が必要なのか。

そして、どんな研究キャリアがあるのか。

ただ、じっと待っていても答えは見つからない。

いろいろな人に出会い、

さまざまな場所を見ることで

自分の未来を描くヒントを見つけよう。

変化を楽しみながら

さあ、自分の場所を探しに行こう。

## 探しに行こう 自分の場所

# 研究と実務の両輪を回せる プレイヤーを目指して

岩本 慧悟 さん

株式会社ZENKIGEN ZENKIGEN Lab 研究員  
東洋大学大学院 博士後期課程

どんなに研究への熱意があっても、アカデミアでのキャリアパスに不安を感じる人は多い。探究の楽しさに魅了され、社会心理学・組織行動論の研究を行ってきた岩本さんもその一人だった。岩本さんはアカデミアの激しい競争環境で将来像に不安を感じ、一度就職したという。岩本さんは回り道をした先で、どのように研究者としての強みを手に入れてきたのだろう。



### 卒論が終わった後も心理学を追究したい！

人の価値観や信念への関心から心理学系の学部に進学し、人間の認識・解釈が行動や身体に与える影響に興味を持った岩本さん。大学1年から指導を受ける中で、楽しそうに研究する恩師の影響を受けたと語る。また集団心理学の講義で同調についての研究を知ったことから、コンビニや塾のアルバイトでレシートを裏返しにしておくか、他の人も裏返しに置くのか、というような小さな実験と分析を繰り返す中でも、研究の楽しさを実感したという。「どんなに小さなことでも、誰も知らなかったことを初めて知ることになりました」。卒業論文では「能力」の捉え方の違いが、就職活動での職業適性検査の結果や就活経験談の解釈を生じさせ、モチベーションに影響する心理過程を扱った。しかし12月の卒業論文の提出後には、ストレスの解釈が身体に与える影響にも興味を持ち、別の研究を始める。「指導教員に『え、まだやるの?』と言われながら、残り

の大学生活のギリギリまで研究をしていました」。この時に始めたストレスのマインドセットについての研究は、現在に至るまで岩本さんの軸の一つとなっている。

### 企業での「採用」もテーマになると気づく

研究に夢中な学部生の岩本さんだったが、人文社会系研究者のキャリア形成の難しさや、大学院生に対する「まっすぐ進学してこの人達と対等に渡り合えるだろうか」という不安も同時に感じていた。転機となったのは、大学3年の頃に参加した、心理学の手法で企業の人事課題を解決する産学連携プロジェクトだ。その際、勉強熱心な人事担当者も心理学の知識をあまり知らなかったため、自身の知見を活かせそうだと感じ、「企業で働くのも面白そうだ」と思ったという。その後新卒で就職し、人事やデータ活用プロジェクトの推進などの業務に従事する。就職により岩本さんは、採用時に行う適性検査のデータが十分に分析されていないことを知ったという。また採用現



▲面接におけるコミュニケーションの分析の様子（再現）

場での応募者の見極めは感覚的に行われているため、データを取得し研究する余地がたくさんあることも分かった。それらのデータは知見がないと扱いにくいですが、研究で分析のスキルを培ってきた岩本さんには扱うことができる。一度就職したことによって、自身の強みを活かして向き合える実務的な研究課題を見つけたのだ。

## 研究者としての成長で実務も加速するはず

岩本さんは就職後も、将来的に働きながら大学院に通いたいと上司に伝えたり、学会参加や論文投稿を続けたりと、研究者としてのキャリアアップを見据えていた。働く中で大学院進学によるスキルアップは実務にも活きると確信したこともあり、入社3年目には東洋大学大学院博士前期課程に進学する。社会人のために夜間や休日に開講される大学院もあるが、岩本さんは「研究者としてのトレーニングに重きを置きたい」と、日中に開講されるコースを選択した。フルタイムでの勤務との両立には困難も多かったが、勤務日や勤務場所を調整しつつ、修士号取得に至った。岩本さんはアカデミアの中でも外でも、自身に足りないものを冷静に分析し、着実にキャリアを積み重ねてきたのである。

## 岩本 慧悟（いわもと けいご）プロフィール

新卒でディップ株式会社に入社後、同社在籍中に東洋大学大学院博士前期課程に進学。複数社の研究員を歴任し、現在は株式会社ZENKIGEN ZENKIGEN Labの研究員をつとめながら、東洋大学大学院社会学研究科博士後期課程に在学中。大学の兼任講師として教育活動にも従事している。

## どんな場所でも研究の種を集める

博士後期課程に在籍する現在は、ストレスのマインドセットに関する研究と並行して、実際の採用面接の動画を用いたコミュニケーションの分析や熟達した面接官の実践知の調査など、実務的な研究も複数行っている。面接動画の研究利用を認める企業は稀だが、やりたいことをアピールした結果だ。こうして、転職する先では常に新たな研究のフィールドや素材を獲得してきた。様々な場所を渡り歩いてきた自身を「流されてきた」と話す岩本さんだが、流れ着いた先で手をこまねいていた訳ではない。現在も企業の人事で起こる様々な事象を見ている中で、研究のアイデアが浮かぶことが多いという。「まっすぐにキャリアを進まなくても、企業で働いて研究の種を集めながら研究していた経験は生きてくると思いますし、すごく楽しいですよ」。今後も岩本さんは研究者として、研究はもちろん、心理学の手法や知見を実務へ還元することも続けていくつもりだ。既存のルートに拘らず柔軟に研究を楽しむ岩本さんは、実務と研究のいずれかに限定されない、新たな研究者像を切り拓いていくことだろう。

文：甲斐 晴奈

取材後の会話からも新たな研究の着想を得たという岩本さん。研究の種を拾い集める秘訣は、生活のあらゆる場面での気づきに向き合うことを楽しむ姿勢にあると感じました。



## 探しに行こう 自分の場所

# 命を救いたい！本気の行動が 出会いを導き、想いの実現へ

浅川 拓克 さん

八戸工業大学 工学部  
准教授

八戸工業大学の准教授である浅川拓克さんが開発しているのは「ドクターカー」と呼ばれる、迅速にかつ多くの人の命を救うための自動車だ。そこには、被災地で目にした課題から生まれた情熱が詰まっている。高校教員時代から現在まで、ご縁を通じて得た仲間と開発まで進んできた道のり、そしてそこにかけてきた想いとは。



### 好きな自動車を通じ、 思いがけず大学教員の道へ

昔から自動車が大好きだったという浅川さん。中高時代に車の魅力に心を奪われた。その後も自動車を専門に学ぶと、関連する企業職に就いた。最初の転機は、たまたま盛岡中央高校の自動車科での教員募集が目についたこと。応募してみたところ採用され、やんちゃな生徒たちを相手にする生活が始まった。そのうち、浅川さんは岩手県自動車整備振興会が夜間に開催している整備講師も務めるように。そこで知り合った整備工場のオーナーが、たまたま新聞に掲載されているのを見つけ、初めて八戸工業大学の栄養教授だったと知る。驚いて電話すると、夏休みのエンジン講座への参加や手伝い、集中講義も任されるように。2008年にできた自動車工学コースに浅川さんは適任だったのだ。ある日「本格的に大学へ来ないか」という誘いがあった。ずっと高校生達と過ごすと思っていた浅川さんは悩んだ。しかし、高校の経営法人の理事長からもらった「1人の人間と

して、君のキャリアを応援したい」との言葉に背中を押され、18年親しんだ高校を離れ、大学での挑戦をすることにした。

### 「助けられる命」を救いたい

大学に移ってすぐのこと、東日本大震災発生から1ヶ月後の岩手県釜石市へボランティアで訪問した。当時、被災地では災害関連死が多く起こっていた。仮設住宅での避難生活に加え、十分な医療を受けられるような状態ではなく、低体温や急性心不全などで命を落とした方の葬儀が次々行われていた。「医療処置ができれば、今も生き続けられた人もいる」と語る現地の人々の声が浅川さんの胸に突き刺さった。祖父の代まで医師の家系だったこともあり、心のどこかで医療への憧れがあった浅川さんは「救えたかもしれない命」をどうにかして救いたいと思った。思い浮かんだのは、これまで関わり続けてきた自動車。機動性があるので駆けつけるのに小回りが効き、到着した先の車内で手術ができるのではないかと。浅川さんは「命を救いたい」想いをかたちにするため、動



▲社会実装され、患者の救命救急を行う「ドクターカーV3」。

き出した。

## 医師と共に創りあげたドクターカー

「医療として使えるのか不安でしたが、幸いにも同じ想いの方向性を持つ医師に巡り会って開発ができました」。八戸市の救命救急の改革に挑む今明秀さんである。大きな病院まで3時間かかる道のりにドクターヘリを導入することで治療開始までの時間を短縮した医師だ。そして、今さんが次に導入を目指していたのが離着陸に制約のないドクターカー。二人のビジョンが重なった。経皮的な心肺補助装置を使用した体外循環式心肺蘇生が可能な緊急手術室を搭載した車両をデザインし、災害時や救急に用いられてきた車両において課題だった、治療に不便のない広さの設計と、電力や機動性の確保を両立させた。医療従事者への尊敬を込めて見た目のカッコよさを兼ね備えるデザインにもこだわった。ただ、車が完成しても運行許可が取れず、批判されることもあり苦難が続いた。それでも、救命救急時の今さんの「必ず助けますからね」という言葉に改めて熱い想いを感じ、奮闘し続けた。そして、開発から4年後の2016年7月に「ドクターカーV3」の運用が開始された。V3で救命処置を受けた患者が無事に後遺症も無く退院できた事例など、着実に成果を上げ続けて

浅川 拓克 (あさかわ たくかつ) プロフィール

北海道自動車短期大学を卒業後、民間企業、高校教員を経て、八戸工業大学工学部工学科にて准教授。東日本大震災後、自動車を活用した救急・災害医療の研究を開始。日本初となる現場での手術を目的とした「ドクターカーV3」を開発し、令和3年度文部科学大臣表彰科学技術賞（開発部門）を受賞。

いる。

## 救命救急の課題に向かって、挑戦は続く

浅川さんには大きく2つの目標がある。まず災害時の現場から聞こえた課題であるトイレ。仮設トイレが不衛生になりがちで感染症が蔓延しやすくなってしまうという。いつでも清潔に使えるトイレカーを開発することが1つ目の目標だ。2つ目は、ドクターカーの救命率をさらに上げること。具体的には、レントゲン透視装置を搭載した緊急手術室をドクターカー内に作ろうと試みている。これまで、交通事故など大出血を伴うときの止血に課題があった。名人級の救急医でないで止血ができず、命を落とす危険性がある。レントゲン透視装置を搭載することで、救急医の誰もが大出血や骨盤骨折にも対応できるようになる。「本気でやろうとすると必ず誰かが助けてくれます」。これまでの経験を胸に、浅川さんは語る。ひとつひとつの出会いを大切にしながらその輪を広げ、これからも社会課題を解決する道のりは続いていく。

文：阿部 真弥

話をお聞きする中で、浅川さんから常に感じる熱い想い。まさにこれが様々な方の心を動かしていったのだらうと感じました。私も、自らの専門性を「社会や身の回りの困りごとに活かすなら」という視点を持ち、出会いを引き寄せていきたいです。



## 探しに行こう 自分の場所

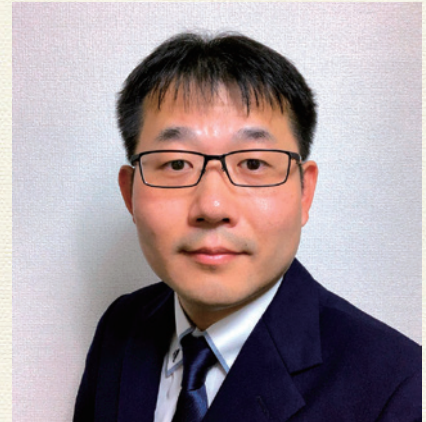
# 北極から始まった、 生態学研究者という生き方

吉竹 晋平 さん

早稲田大学

教育・総合科学学術院 准教授

早稲田大学の吉竹さんは、生態系における物質循環やそれを支える土壌微生物の働きを研究している。昔から研究者を目指してきたかと思いきや、以前は明確な将来像がなく、受動的なキャリア選択をしていたという。そんな吉竹さんがどのような経緯で研究の面白さに気づき、研究者になる決断をしたのかを伺った。



### 直感で進んだ研究の道

大学に入学した後も将来像が明確でなく、大学院に“修士”、“博士”課程があることもよく知らずに過ごしていたという吉竹さん。幼少期は周囲に野山しかない環境で育ち、高校は地元で1つしかない普通科に進学した。高校では友人に誘われてワンダーフォーゲル部に入学したり、担任の先生の勧めで進学先の大学を決めたりと、他の人から影響を受けることが多かった。「将来何になりたいという考えはなく、大学の学部も入学してから専門を選べる総合科学部を選びました」と当時を振り返る。学業は真面目に取り組んでいたという吉竹さんだが、研究室選びの時期も友人について行く形でいくつかの研究室を見学しにいったという。元々は、好きだった化学系の研究室に入ろうと考えていたが、見学先の研究室の教授が生態学について熱く語るのを聞いて直感的に面白さを感じ、それまで関心がなかった生態学の研究室を選んだ。「1つ1つは見えないくらい小さな微生物が群集としてはたらいて、生態系という巨大なシ

ステムを土の中から支えているという話にロマンを感じたんです」。

### 北極での経験が人生を変えた

生態学の研究室に飛び込んだものの、将来像は曖昧なままだった。漠然と、修士を出て企業に就職するものだと考えていたという。しかし、ある時突然、教授から「北極行かない？」と言われた。北極圏で行われるフィールド調査を手伝って欲しいという話だった。それまで海外に行ったことすらなく、北極ってどこ？という感じだったそうだ。しかし、ここでもとりあえず誘われるがままに行ってみることにした。飛行機を10時間以上乗り継いでたどり着いた北の果て、そこで大きなショックを経験することになる。今まで見たこともない氷河が立ち並ぶ極限環境のなかで、自然と対峙しながら本気で研究活動に取り組む研究者たちの姿を目の当たりにしたのだ。そんな環境で約1ヵ月半にわたって調査を行う中、「自然のしくみをもっと理解したい」という気持ちは膨らんでいった。しかし同時に自分の無力さも痛感し、「自



▲富士山の中腹に広がる火山荒原でのフィールドワークの様子

分は学生で、ただのお手伝いだから」と心の中で言い訳する甘い考えにも気がついた。帰国後も北極での体験は心に刺さったまま。これまで受動的だった吉竹さんだったが、「この後の人生、どうする？」と初めて主体的にキャリアを考え始めるきっかけとなった。

## 大変だからこそ面白い意義があると知る

北極での研究生活は忙しく大変なものだったが、吉竹さんはその中にやりがいを感じていたという。北極の場で研究者と意見を交わす時は、真剣勝負になることが多かった。「想定通りにいかないことが研究の厳しさであり、面白さでもあると気づきました」と振り返る。これが吉竹さんの研究者人生の始まりだった。さらに研究の面白さを引き立てたのは論文を書くことだ。当初、研究していても学術誌に論文を投稿することは意識していなかったというが、教授に背中を押され、修士の頃に論文を書いた。特段すごい結果だとは思っていなかったが、自分の論文が海外の他の研究者に引用されたり問い合わせがきたりしたことで、自分の研究が他の人にも影響を与えることを実感し、研究の醍醐味を感じるようになったという。

吉竹 晋平（よしたけ しんべい）プロフィール  
広島大学生物圏科学研究科にて博士号を取得。現在は生態系の遷移や物質循環、土壌微生物群集の機能を研究。亜熱帯から北極までさまざまな生態系を対象に研究を行っている。近年は気候変動緩和策の1つでもある炭化物（バイオ炭、バイオチャー）を用いた炭素隔離に関する研究にも取り組んでいる。

## “飛び込んでみる”姿勢が今につながる

いくつかのきっかけを経て研究の魅力に気づき、主体的に人生を考えるようになった吉竹さんは、自らアカデミアに残ることを決めた。それ以来、物質循環を通した生態系の営み、それを支えている土壌中の微生物の働きを解明したいという好奇心に突き動かされ、研究を進めてきた。さらに、この知見の蓄積により、環境問題解決への貢献も目指している。「気候変動などの環境問題を理解するには、生態系の物質循環を知ることがとても重要です。例えば、人為的な炭素排出（CO<sub>2</sub> 排出）よりも、自然に循環している炭素の方が圧倒的に多く、大気CO<sub>2</sub>濃度の変化を考えるにはこの炭素循環の変化に注意を払う必要があります」と話す。学生時代は受動的な選択をすることが多かった吉竹さんだが、面白そうだからととりあえず飛び込んでみる、という姿勢が結果的に今に活きている。偶然の出会いを逃さず、“まず飛び込んでみる”ことが自分の好奇心に気づくきっかけになり、それがキャリアを切り拓いていくための原動力となっていくのかもしれない。

文：塩川 雅貴

自分が学生のころから知っていた吉竹さんの、学生時代は主体的にキャリアを考えたことがなかったという話に驚きました。しかし、面白そうと思ったら飛び込んでみるのが今のキャリアにつながっていると感じました。



# 私らしく、研究者として生きる道へ アド・ベンチャーフォーラム



## 『Add Venture Forum (アド・ベンチャーフォーラム)』は

「社会課題の解決のために世に無いものを開発し、社会実装する」ことを目指す研究開発型のベンチャーと、学生・ポスドクといった若手研究人材とベンチャー企業が出会う場です。「これからの研究テーマや課題」、「社会に貢献したいこと」を熱く語り合う中で、固定概念に捕らわれない研究を活かす方法、自らの研究者としての新しい生き方・働き方を切り拓きましょう！

## プログラム

### パネルディスカッション・セミナー

各回ブースセッションの前にそれぞれに趣向を凝らした先輩若手研究者らによるパネルディスカッションやショートセミナーを実施しています。特に研究者の1分自己紹介をよりパワフルにするショートセミナーは毎回開催しており、その後に実施するブースセッションにて、異分野のベンチャーや担当者が相手であっても本質的な議論を行えるようになるための準備体操になっています。

### ブースセッション

アド・ベンチャーフォーラムのメインプログラムです。各企業が掲げているテーマを踏まえ、自分の研究やビジョンを重ね合わせてどんな活動が一緒にできるのかを議論しましょう！



### (2024年11月参加各社のテーマ例)

株式会社 Eco-Pork	食肉生産を持続可能にするために必要な◎◎とは？
株式会社サンケイエンジニアリング	仕事における「感性」を見極めるには？
株式会社セルフファイバ	細胞で人類をいかにして豊かにできるか
fabula 株式会社	研究のチカラで爆発させる！未利用資源から生まれた新素材の魅力
モバイル・インターネットキャピタル株式会社	ベンチャーキャピタルとは何か？
株式会社山田商会ホールディング	あなたが考える、人と地球の「レジリエンス」とは？
ugo 株式会社	人と共に働くロボットを「社会実装」するために必要な新しい視点とは？
株式会社 Liberaware	世界最小ドローンであなたは何したい？
株式会社アグリライト研究所	植物と人が歩む未来とは？
株式会社フツパー	AI で目指すモノづくりの未来
株式会社 MACHICOCO	次世代のモノづくり教育について
レボックス株式会社	あなたの専門性×光技術は、世界にどのようなインパクトを与えられそうか？



## アド・ベンチャー奨学金

「こんなこと一緒にできそうだね！」が生まれたら、それが始まる「いつか」を待つ必要はありません。共同研究？インターン？それ、今すぐやりましょう。アド・ベンチャー奨学金では、出展企業と参加学生のコラボレーション企画に対して10万円の活動費をサポートしています（1社につき1件程度採択予定）。その場で申請内容を考えることで、ベンチャーとの活動方針が明確になり、採択不採択にかかわらずその後も議論できる関係性を築くきっかけになります。



### 〈2024年11月参加各社のテーマ例〉

株式会社 MACHICOCO × 福山大学 村上 カ丸 さん	壊して創る ものづくり教室
株式会社アグリライト研究所 × 福本和正 さん	アマモ場における底質分析と土壌環境のマークシート化
株式会社山田商会ホールディング × 小倉彰紀 さん	空気 DNA 分析を使用した屋上庭園における鳥類の生息地利用の解明と従来モニタリング手法との比較
fabula 株式会社 × 山西 沙来 さん	廃教科書を活用したサステナブル本棚の開発
ugo 株式会社 × 尹寧得 さん	人間と共に働くロボットを社会実装するための適応的信頼補正
モバイル・インターネットキャピタル株式会社 × 長岡 瞬 さん	色覚異常者のための支援デバイス
株式会社 Liberaware × 山口 洋 さん	小型軽量ドローン搭載用の化学“リトマス紙”の開発

## 次回実施は4月！東京&大阪でお待ちしています！

### アド・ベンチャーフォーラム 2025 春 in 東京

[日時] 2025年4月19日(土) 13:00～17:30

[場所] センターオブガレージ  
(〒130-0003 東京都墨田区横川1-16-3)

#### [WEB]

<https://avf.lne.st/avf/avftokyo/>

### アド・ベンチャーフォーラム 2025 春 in 大阪

[日時] 2025年4月26日(土) 13:00～17:30

[場所] 大阪市内

#### [WEB]

<https://avf.lne.st/avf/avfosaka/>

**詳細・申込みはwebから！**  
アド・ベンチャーフォーラムで検索！

アド・ベンチャーフォーラム

検索

# 研究キャリアの相談所

## 募集中の求人情報

研究に熱い企業があなたを待っています！

QRコードから各求人の詳細情報をご覧いただけます。興味のある方は各ページの「エントリーする」からご応募ください。リバネスの担当者からご連絡します。

募集職種

研究企画職

### 株式会社イノカ

アクアリストの力と AI・IoT 技術を組み合わせる任意の生態圏を水槽内に再現する『環境移送技術<sup>®</sup>』を活用した事業を展開。「自分たちが好きな自然をみつづける。」をフィロソフィーに、「人類の選択肢を増やし、人も自然も栄える世界をつくる」ことを目指しています。本技術を用いて、海水・淡水問わず様々な水環境を再現した水槽内で行う研究、リアルな生態系を子どもたちに見せる環境教育（環境エデュテイメント）を行なっています。



募集職種

研究企画職

### aiwell 株式会社

東工大発ベンチャー企業として、東京工業大学との間に協働研究拠点を設け、タンパク質の網羅的解析技術『プロテオミクス』の実用化と社会実装を進めています。タンパク質の変異を画像の比較で特定することで、創薬の現場等でのバイオマーカー候補の早期の発見や、化粧品や食品等の効能効果のエビデンス取得も可能になりました。将来的にはタンパク質を AI の画像判断技術に落とし込み (AI プロテオミクス)、病気の早期発見や医師の診断支援を目指しています。



募集職種

事業開発職

### 株式会社 AutoPhagyGO

大阪大学発バイオベンチャーとして、オートファジー研究の成果を産業活用することを目的に設立されました。細胞内の物質や構造を分解して、細胞を再生する「オートファジー」は、老化の予防や老化関連症状を改善させる食品等の開発や、老化関連疾患の治療を行える可能性がありますと期待されています。オートファジーに関する研究開発と社会実装のオープンイノベーションプラットフォーム構築のための仲間を募集しています。



募集職種

プロジェクトリーダー職

### 株式会社ガルテリア

耐酸性紅藻「Galdieria」を通じた貴金属及びレアメタルのリサイクル事業、水質浄化事業、土壌浄化事業における研究開発及び製造を行っているスタートアップ企業です。目下、実現に向けて、藻類の大量培養技術に挑戦する経験のある方を募集しています。地球規模の課題解決のための研究開発をしてみたい、と思っている方、ぜひ仲間になってください。



募集職種

研究員 (情報工学・LCA / マテリアルバランス・水工学・水産・微生物 / 微細藻類)

### 株式会社ノベルジェン

バイオテクノロジーを活用したグリーントランスフォーメーション技術を用いて環境問題や食糧問題を解決する事業を行っています。農林水産省中小企業イノベーション創出推進事業（フェーズ3基金）に採択され、事業を加速しており、主任研究員・研究員を募集いたします。



# 『incu・be』を作っているのはどんな人？

編集部スタッフを紹介します



ライター  
西村 知也  
修士（工学）

## プロフィール

株式会社リバネス 地域開発事業部。東京大学大学院 工学系研究科 応用化学専攻で学位取得。研究のキーワード：酵素・一分子・Directed Evolutionなど。学生自身がやりたい研究を見つけ、それを続けていける環境づくりを目指して2019年11月よりリバネスに入社。正解のあること・求められることに答（／応）えてきた人生から一転、自分がしたいことに振り切って動くことに奮闘中。殻を破る！

学生時代には、他学科・他学部問わずさまざまな研究の話を聞いて、知的好奇心を膨らませるのが好きでした（今も好きです）。大規模な技術展にも足を運び、テクノロジーが新しい社会を作っていくさまをワクワクしながらイメージしていたものです。大学院時代には、化学反応を触媒する酵素が、一分子レベルでどのようなメカニズムではたらくているのかを研究しました。一分子という小さくて目に見えないものが、実験やデータを通じて明確な輪郭を帯びてくる経験を通じて、「一つ一つの研究がこうやって人類の可能性を拡張していくんだ」と実感することができました。

そんな大学院時代に出会ったのが、研究と社会をブリッジする「研究者集団」のリバネスです。インターンで中高生の研究を支援する研究コーチや、出前実験教室のTA、『incu・be』のライターをする中で、次第に自分の興味は「研究そのもの」から、それを担う「人」へも拡大していきました。

リバネスに入社してから、「人」への興味はますます強くなっています。研究者が自身の想いをもとに事業化を推進するテックプランターでは多くの研究者に会い、一人ひとりのストーリーや想い・熱に深く触れました。熱を持った個人がいるからこそ、研究は社会に広がっていく。それを知ること、研究の世界をより一層おもしろく感じるようになりました。そのおもしろさをもっともっと広めたいと思い、現在は、編集長として『incu・be』を作成しています。この冊子を読んでいる皆さんには、研究者一人ひとりの生き様を知り、自分の研究者人生をおもしろくするチャンスを掴んでほしいと願っています。

## リバネスでは仲間を募集中です。

「科学技術の発展と地球貢献を実現する」の理念のもと、自らの専門性を活かし、未来を創造するプロジェクトを生み出したい研究者の仲間を募集しています。『incu・be』の制作などを通じて多様な研究者に出会うことができます。リバネスの採用については、28ページ以降をご覧ください。incu・be編集部への投げ込みも大歓迎です！巻末の連絡先までご連絡ください。

# リバネスの「ブリッジコミュニケーション」が学べる インターンの参加者募集！

株式会社リバネスでは、若手研究者の「リバネスの活動に興味がある」「サイエンスと社会を繋ぐ活動をしてみたい」などの声を受け、リバネスの活動の根幹にある「サイエンスブリッジコミュニケーション」を学べるインターンシップを企画しました。ぜひご応募ください。

## ■リバネスのインターンシップ

リバネスが主催する「リバネスユニバーシティー」に参加し、リバネスの仕事の基本である「ブリッジコミュニケーション」について実践的に学べるインターンシッププログラムです。希望する方は別途リバネスが発刊するサイエンス雑誌の記事制作や実験教室等にアシスタントとして挑戦する機会も提供可能です。

### ブリッジコミュニケーション実践（3ヶ月）の詳細

異分野の学生同士、企業で働く社員等が集まる場で、自分の専門を異分野にわかりやすく伝え、社会の中から課題を見つけ、仲間とともに世界を変える価値を生み出すブリッジコミュニケーションを実践を通じて学ぶことができます。リーダーに必要なマインド・思考・価値観を身につけることを目的としています。自分を知り、相手を知る共感的コミュニケーションをベースに、コミュニケーション、プレゼンテーション、リーダーシップ、ライティングに関する新たな考え方を実践を通じて身につけます。社会人受講者も参加するため、刺激的な環境で学ぶことができます。一部のプログラムをリバネスの東京本社でご参加いただきつつ、本社でスタッフが働いている様子を見学いただくこともできます。

実施期間 6月～8月		
6月18日(水) 11:00～18:00	第1回 【ガイダンス】地球貢献に必要な3つのScience Bridge Communication 【講義1】異質なものに橋を架ける共感的コミュニケーション 【ゼミ】個のQuestionとPassion	東京本社 参加推奨
6月19日(木) 09:30～12:00	第2回 【講義2】相手の心を動かすプレゼンテーション 【ゼミ】解決したい課題を見つける	東京本社 参加推奨
7月3日(木) 15:00～17:30	第3回 【講義3】個の熱を源泉に発揮し続けるリーダーシップ 【ゼミ】大きなミッションを描く	オンライン
7月17日(木) 15:00～17:30	第4回 【講義4】相手の心に残る言葉とストーリーをつくるライティング 【ゼミ】仲間を集める企画をつくる	オンライン
7月31日(木) 15:00～17:30	第5回【ゼミ】企画準備	オンライン
8月20日(水) 13:00～17:30	【アウトプット課題】次世代とともに未来構想ワークショップを実践 【ラップアップ】覚悟を決めるQPプレゼン ※本コース修了にはアウトプット課題での発表が必須となります	オンライン

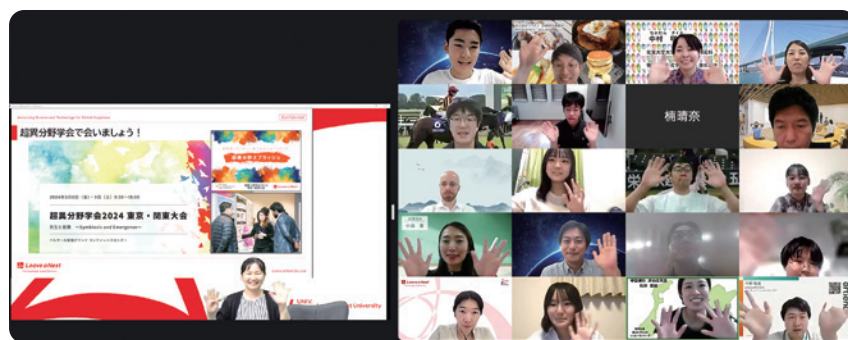
対象：修士・博士・ポスドク／募集人数：10名程度／条件：給与支給：なし／交通費支給：なし

## ■さらなる挑戦の場 (希望者)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・中高生向けサイエンス雑誌『someone』</li> <li>・若手研究者のための研究キャリア発見マガジン『incu・be』の執筆活動</li> </ul>	<p>取材・記事作成のためのレクチャーを受け、実際に記事の企画づくりから取材・執筆を行います。</p> <p>※執筆料支給あり</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・実験教室へのアシスタントとしての参加</li> </ul>	<p>関東・もしくは関西近郊の実験教室へのTAとしての参加をしていただきます。</p> <p>事前に内容の理解や実験リハーサル等で1-2回の打ち合わせを行います。</p> <p>※実験教室当日の交通費と時間給支給あり</p>

## ■リバネスのインターンの考え方

- 業務内容は多岐にわたり、日々変化して行きますが、大切にしたい考え方やコアコンピタンス(強み)である「サイエンスとテクノロジーをわかりやすく伝える。」力は変わりません。  
リバネスでは、会社理解として、この「考え方」を最も体験していただきたいと考えています。
- 実際に、入社後、トレーニングとして雑誌制作や実験教室を通じて、「ブリッジコミュニケーション」の力を徹底的に磨きます。
- ブリッジコミュニケーションはリバネス内だけでなく、社会のあらゆる業界で活用できる力です。  
これまでにリバネス社外の研究者、企業人が多数学び、卒業していきました。



応募・詳細・問い合わせ  
<https://lne.st/jnfj>





## 人材応援 プロジェクト

私たち株式会社リバネスは、知識を集め、コミュニケーションを行うことで新しい知識を生み出す、日本最大の「知識プラットフォーム」を構築しました。教育応援プロジェクト、人材応援プロジェクト、研究応援プロジェクト、創業応援プロジェクトに参加する多くの企業の皆様とともに、このプラットフォームを拡充させながら世界に貢献し続けます。

(50音順)

株式会社ARK  
artience株式会社  
aiwell株式会社  
株式会社IHI  
株式会社IDDK  
株式会社アグリライト研究所  
アサヒ飲料株式会社  
UntroD Capital Japan 株式会社  
株式会社EAGLYS  
株式会社イノカ  
株式会社ACSL  
株式会社Eco-Pork  
エステー株式会社  
株式会社エヌケービー  
株式会社荏原製作所  
株式会社ガルテリア  
カルビー株式会社  
キオクシア株式会社  
キッコーマン株式会社  
京セラ株式会社  
キリンホールディングス株式会社  
建口ボテック株式会社  
幸福ホールディングス株式会社  
株式会社サンケイエンジニアリング  
サントリーホールディングス株式会社  
三和酒類株式会社  
株式会社セルフファイバ  
株式会社Soilook  
綜研化学株式会社  
ソミックグループ  
ダイキン工業株式会社  
大正製薬株式会社  
大日本印刷株式会社  
太陽誘電株式会社  
株式会社中国銀行

DIC株式会社  
東武不動産株式会社  
東洋紡株式会社  
西日本電信電話株式会社  
日本ハム株式会社  
株式会社NINZIA  
株式会社NEST RdLAB  
株式会社ノベルジェン  
長谷虎紡績株式会社  
東日本旅客鉄道株式会社  
株式会社日立製作所  
株式会社PITTAN  
BIPROGY株式会社  
株式会社ヒューマノーム研究所  
fabula株式会社  
株式会社フォーカスシステムズ  
富士電機株式会社  
株式会社フツパー  
株式会社プランテックス  
マイキャン・テクノロジーズ株式会社  
マイスターズグリット株式会社  
Mipox株式会社  
株式会社MACHICOCO  
株式会社マテリアルゲート  
明治ホールディングス株式会社  
株式会社メタジェン  
モバイル・インターネットキャピタル株式会社  
モルミル株式会社  
株式会社山田商会ホールディング  
ヤマハ発動機株式会社  
ugo株式会社  
株式会社吉野家  
株式会社Liberaware  
レボックス株式会社  
ロート製薬株式会社

## 若手研究者のための研究キャリア発見マガジン『incu・be』とは

『incu・be』は、目標を見つけ、それに向かって実力を養い (incubate)、未来の自分をつくり出す (be) ためのきっかけを提供します。自らの未来に向かって主体的に考え行動する若手研究者を、企業・大学とともに応援します。

## 『incu・be』の配布・設置について

『incu・be』は、全国の理工系大学・大学院の学生課・就職課・キャリアセンター等に設置いただいているほか、「研究応援教員」のご協力により研究室や講義にて配布いただいております。学校単位での配布・設置をご希望の場合、その他お問い合わせは下記までご連絡ください。

株式会社リバネス incu・be編集部  
TEL : 03-5227-4198  
E-mail : incu-be@Lne.st

## ++ 編集後記 ++

今号のincu・beを作成するにあたって、1年前の超異分野学会の東京・関東大会を思い出していました。自分は、ポスター発表者によるショートピッチ「超異分野スラッシュ」と、参加者同士の連携の一步目を生み出す「知識製造イグニッション」の企画の進行(案内人)を担当しました。学会となると、研究の内容や「ちゃんとした」成果を話すことに意識がいきがちですが(もちろんそれも大事なのですが)、研究者個人の興味や哲学、「いいね!」「おもしろそう!」といった感性を前面に出して話すことで、こんなにもおもしろい議論が生まれるのかと、熱くなりながら超異分野学会からの帰路ついたので覚えています。今号の特集は、自分にとっても思い入れのある連携事例を取り上げています。読者のみなさんの関心が、研究の「内容」だけでなく、それを担う「人」へも向かっていけば嬉しいです。

(西村 知也)

## Leave a Nest

2025年3月1日 発行

incu・be編集部 編

編集長 西村 知也

編集 井上 麻衣/大坂 吉伸/環野 真理子

岸本 昌幸/藏本 斉幸/瀬野 亜希

中嶋 香織/花里 美紗穂/伊 晃哲

記者 阿部 真弥/井上 剛史/甲斐 晴奈/塩川 雅貴

正田 亜海/戸上 純/仲栄真 礁/八木 佐一郎

art crew さかうえ だいすけ

清原 一隆 (KIYO DESIGN)

発行人 丸 幸弘

発行所 リバネス出版 (株式会社リバネス)

〒162-0822 東京都新宿区下宮比町1-4

飯田橋御幸ビル6階

TEL 03-5227-4198

FAX 03-5227-4199

E-mail incu-be@Lne.st (incu・be編集部)

リバネスHP <https://lne.st>

印刷 株式会社 三島印刷

© Leave a Nest Co., Ltd. 2025 無断転載禁ず。

中高生のための研究キャリア・サイエンス入門  
『someone』(サムワン)



研究をはじめたばかりの読者に、最先端の研究内容をご紹介します。  
未来の研究仲間となる後輩にお勧めください。  
お問い合わせ: ed@Lnest.jp

